

ラインホルト・シュナイダーの『カモンイスの苦悩』

下 村 喜 八

はじめに

ラインホルト・シュナイダーは晩年の自伝的作品『バルコニー(Der Balkon)』のなかで、少年時代に、自宅でもあるホテルの読書室で『世界図絵(Orbis pictus)』をながめていたときに、カモンイス(Luis de Camões 1524?-1580)の絵を見たことを回想して次のように記している。「そこで私は甲冑を身につけ、月桂冠をかぶり、独眼で、苦悩の表情を浮かべたカモンイスの像を見つけたのだが、彼は、いわば私のうろんな生涯の船首像(Galionsfigur)となった¹⁾」。

1926年にシュナイダーはスペインの哲学者ミゲル・デ・ウナムーノによってポルトガルへの興味を喚起され、ポルトガルの歴史と文学の研究を始める。特に彼の心を捉えて放さなかったのは、16世紀のポルトガルの国民的詩人カモンイスであった。彼はカモンイスの代表作である叙事詩『ウズ・ルジアダス(Os Lusíadas)』やソネットや牧歌を原語で貪るように読んだ。生の精神的基盤の喪失、その意味と目標の欠如に苦しむ若きシュナイダーにとってカモンイスは、彼が受けた生涯にわたる影響という点で、スペインの実存哲学者ウナムーノと同じほどに決定的な意味をもっていた。シュナイダーはカモンイスの生涯と作品に取り組むなかで、自分の経験と現在の心象を文学作品という形で表現する可能性を発見した。それは詩人となるべき自己の使命の発見でもあった。そればかりではなく、シュナイダーにとって無意味な生に意味を与えるもの、彼にとっての救いともなった。自伝『曇った日(Verhüllter Tag)』のなかで彼は、「それは個人的なものから超個人的なものへといたる中間、移行であり、私にとっては救いであった。目標と意味としての自我は致命的である。そのことを私は経験していた。自我は歴史のなかに組み入れられるときにはじめて耐えうるものとなる²⁾」(VT54)と書いている。カモンイスとシュナイダーは没落の時代に生きるとともに自己の内なる没落を経験するという意味で重なりを見せる。両者はどのようにして没落を克服したのであろうか。シュナイダーの没落の克服に、さらには彼の生涯の歩みにとってカモンイスはどのような意味をもっていたのであろうか。

カモンイスへの私淑と研究からシュナイダーの『カモンイスの苦悩』が生まれた。シュナイダーは、この作品について次のように語っている。「この本は一種の序曲と言えるもので、ここには

私の生涯の仕事のほとんどすべての主題が含まれている。さらに、倫理的および歴史的にみて西欧の致命的な運命と言わなければならないヨーロッパの植民史との対決の最初も含まれている³⁾。したがって、この作品は、作者にとって詩人としての使命の自覚と実行、および存在の意味づけをもたらしたものであるとして計り知れず大きな意味をもつとともに、「シュナイダーの全作品を解く鍵⁴⁾」でもあると言うことができる。

また、カモンイスはシュナイダーにとって単にひとりの詩人ではなく、「近代の最も偉大な叙事詩人⁴⁾」である。しかし単に文学史のなかの代表者でもない。シュナイダーによれば、彼はポルトガル国民の代表者、国民の運命の代表者である。そればかりでなく世界の遺産でもある。どのような意味でそのように言えるのであろうか。

この論考で、われわれは、主としてシュナイダーの最初の傑作『カモンイスの苦悩』を取り上げ、シュナイダーの歩みにとってカモンイスがもっていた意味、およびシュナイダーのカモンイス理解と評価について考察する。

1. 作品の成立と当時の評価

ウナムーノによってポルトガルへの興味を喚起されたシュナイダーは、1928年8月初旬にポルトガルへ旅立った。8月15日にリスボンに到着し、間もなく近くの都市カスカイスに下宿、そこでポルトガルから得た印象を書き留めはじめる。10月末にポルトガル滞在を中断し、4週間のスペイン旅行を行い、再びカスカイスに戻り、ポルトガルについての論文の執筆を続行するかたわら、カモンイスについての書物を書きはじめる。前者の旅行記は1931年に『ポルトガル ある旅行記(Portugal, Ein Reisetagebuch)』として出版され、後者はドイツに帰国後1929年11月にドレスデンで完成し、1930年に『カモンイスの苦悩あるいはポルトガル権力の没落と完成(Das Leiden des Camoes oder Untergang und Vollendung der Portugiesischen Macht)』(『カモンイスの苦悩』と略記)という表題でシュナイダーの最初の書物として世に出た。シュナイダー27歳の時である。『カモンイスの苦悩』はシュナイダー自身の言葉にもあるように、学問的な歴史書でも、詩人についての伝記でもない。彼のもっぱらの関心は、ポルトガルの没落の歴史と、没落を招く原因となったポルトガル国民の性格、そして詩人カモンイスによる没落の克服にある。しかし、ポルトガル没落の原因と国民の性格についてはすでに論じたことがあるので、ここでは考察の対象から除くことになる。

この書物は1930年の8月に出版された。すでに同じ年の9月に、ヘルマン・ヘッセは、「シュナイダーは、ひとりの詩人とその作品について今までに私が読んだもののなかで最も愛情に満ちた、最も収穫の多い解釈を与えている⁵⁾」と、この作品を高く評価している。1931年の6月に、ポルトガルは、この書物に対して、ポルトガルのもっとも栄誉ある勲章の一つである、学問、文学、芸術のためのサント・ジャゴ勲章を贈ろうとしたが、シュナイダーの母親が、その意向を伝えるポルトガルの教育大臣グスタヴォ・C・ラモスからの手紙をシュナイダーに転送するのを忘

れたため、彼はこの勲章をもらいそこねてしまった。11月23日、母親宛のシュナイダーの手紙には「大臣に献呈本を送りさえすればよかったことでしょう。(中略)しかし何一つ私のもとには届かないというのは、昔からの私の悲運です⁶⁾」と書かれている。シュナイダーの無念さが滲み出ている。自立した作家の道を歩みはじめたばかりの時期だけに、その落胆は推し量れないほど深いものであったと考えられる。翌年の5月10日付けのアンナ・マリア・バウムガルテン宛の手紙にも、「もうずっと以前から歴史全体が私に不利なように働いてきました。(中略)私には何かある勲章をもらうというようなことはないでしょう⁷⁾」と書かれている。

1933年4月にウナムーノはある雑誌でシュナイダーの『カモンイスの苦悩』と、それに次ぐ大著『フィリップ二世あるいはスペインの宗教と権力(Philipp der Zweite oder Religion und Macht)』(1931年出版)について言及し、「両作品にはポルトガルとカスティーリアについて、すなわち16世紀の両国の歴史について書かれた最も美しい頁が何頁も含まれている」と高く評価し、イベリア語のどれかに翻訳することを勧めている。しかしこのことをシュナイダー自身が知ったのはずっと後の1955年のことである⁸⁾。もっと早く知っていれば、ウナムーノに宛てた手紙の返事がもらえなかっただけに、彼の喜びはがどれほど大きかったであろう。

1931年1月4日にシュナイダーは、当時のドイツにおける精神史的文学の代表者であるフリードリヒ・グンドルフをハイデルベルクに訪れ、彼の『カモンイスの苦悩』について意見交換を行った。この訪問はシュナイダーにとって生涯忘れられないものとなった。彼の日記および自伝『曇った日』から、彼の落胆の大きさが読み取れる。問題のまず第一点は、カモンイスという詩人についての評価の違いであった。グンドルフは、カモンイスはせいぜい高く見積もってもシュレージエン出身の詩人オーピッツぐらいである、あるいは17世紀のドイツの詩人グリューフius程度であると言った。シュナイダーは、カモンイスに対する評価の低さに驚き、次のように書いている。「私はその意見にあきれかえるばかりか、滑稽だとも思った。なぜなら、カモンイスは今もなお生きているが、オーピッツは彼自身の国ですら死んでいるからである。カモンイスは代表者である。しかしオーピッツは全然そうではない。グンドルフは次にグリューフiusをもちだしたが、同様の理由からグリューフiusとも比較することはできない。今や私はグンドルフが私の本をまったく理解しなかったことを知った⁹⁾」。このように、ポルトガルの歴史においてカモンイスがもっている意味について、またポルトガル人に与えつづけてきた精神的な影響についてのグンドルフの無理解は、シュナイダーにとって「真面目に受け取ることができないほどに信じがたいものであった⁹⁾」。問題の第二点はシュナイダーの作品に係わっている。グンドルフによれば、上記の意見からも分かるように、シュナイダーの作品はカモンイスを高く評価しすぎだということになる。さらにグンドルフは、『カモンイスの苦悩』を美しい才気に富んだ書物であるとはめる一方で、私はそれ以上を要求するのだとも語った。それに関し、シュナイダーは、「私はこの本を、美しいものにしようとして書いたのでもないし、才気に富んだものにしようとして書いたのでもない」、「この〈それ以上〉をこの本にもたせていると信じていた⁹⁾」と書いている。グンドルフのいう〈それ以上〉が何を意味しているのかは明らかではないが、シュナイダーがこ

の書物で書こうとした＜それ以上＞が何であるのか、また「カモンイスは今もなお生きている」および「カモンイスは代表者である」という言葉が何を意味しているかを、われわれはこの論考において明らかにできるであろう。

2. 歴史的なものへの道

シュナイダーは生涯を振り返り、およそ30歳でカトリックに回心するまでの自分を「悲劇的ニヒリズム」(VT9)の時代と呼んでいる。若いシュナイダーはいたるところで没落を感じた。彼を苦しめたペシミスティックな没落感情の要因を、時代、家庭、個人的体験という三つの視点から簡潔に叙述すると以下ようになるであろう¹⁰⁾。

自伝『曇った日』の序言を、シュナイダーは「中国のことわざによると、人間は父に似るよりも、その時代に似ると言われている」(VT9)という文章で書きはじめ、さらに「この担いきれないほど重い主体性を、私は歴史的なものとの関連のなかでしか捉えることができない」(VT9)、「歴史的なものと主体的なものとの間に境界線はない」、「時代はわれわれの内では生じる」(VT10)とつづけている。時代の子シュナイダーの没落感情を、何よりもまず彼の置かれた時代から理解しなければならないであろう。

第一次世界大戦前の10年間、すなわちシュナイダーの生涯の最初の10年間において、ドイツ経済は、工業の発展と世界政策に支えられて、目ざましい繁栄期を経験する。たとえば1913年までに世界生産高に占めるドイツの割合は16パーセントにまで上昇している。特に銑鉄と鉄鋼の生産高は世界生産高の約25パーセントに達している。しかし、他面、工業資本主義の発展と経済的繁栄のもとで、経済と技術の実利主義、泡沫会社乱立時代の成金主義、社会の進歩を信じる楽天主義が幅をきかせるようになり、精神的諸価値の硬直化と貧困化が進行していた。時代をもう少し遡って考えると、「19世紀中葉より科学技術では他国をはるかに上回る功績を上げていたドイツは、以来、他のどの先進国よりも急カーブの近代化の道を辿り、急激かつ大規模な環境の変化を経験したのだから、そこから生まれた心理的方向感覚の喪失もまた際立っていた。それは＜前方への逃避＞(ヴォリンガー)あるいは＜方向なき発酵＞(デープリン)といえる¹¹⁾」。

ヴォルフガング・フリーヴァルトはダーヴィンの進化論が、19世紀の終わりごろから20世紀の初めにかけて人間の精神と社会の両面に及ぼした多大な影響を指摘している¹²⁾。宇宙を創造し、支配し、保持する人格的な神にとって代わって、すべてを支配する因果律が登場する。進化による宇宙の発展という考えは、神の摂理の存在を否定し、世界像を水平化し、そして倫理的な世界秩序を破壊する働きをした。それはまた決定論、盲目の運命論として、人間から意志決定の自由を奪うことにもなった。1903年にダーヴィニズムの通俗的な叙述であるエルンスト・ヘッケルの『世界の謎(Die Welträtsel)』の廉価版が出版され、ドイツ国民に大きな影響を与えた。フリーヴァルトは、この1903年を、「技術の傲慢と運命論的な進歩信仰が頂点に達した年¹³⁾」と見なしている。そして「社会的ダーヴィニズムのイデオロギーは、ドイツ市民階級と小市民階級を、ヴィルヘル

ム主義の時代から今世紀の20年代と30年代へと運んでいった。この時代を捉えたのは、きわめて深いペシミスティックな信仰であった¹⁴⁾。シュナイダーの場合、このペシズムは、後にショープンハウエルとウナムーノを学ぶことによっていっそう明確な形を取るようになるが、フリーヴァルトも指摘しているように、ペシズムと没落の運命論は、彼の時代の思想と完全に一致して、若きラインホルト・シュナイダーの規定的なテーマとなる¹⁴⁾。

彼が実科学学校時代の11歳から15歳の間に経験した第一次世界大戦は、歴史の巨大な力、およびその悲劇的な現実との最初の出会いであったが、ヨーロッパの多くの詩人や思想家にとってそうであったようにシュナイダーにとっても、社会の基盤、文化、伝統的価値の崩壊を意味していた。シュナイダーはこの戦争による没落を、単にドイツの没落であるばかりでなく、ヨーロッパ全体に係わることがらと考えている。「私は若い頃に没落を経験した。単に祖国の没落という意味においてではなく、ヨーロッパの没落という意味においてである¹⁵⁾」。また、実科学学校時代の教育を振り返って次のように語っている。「水で薄められたドイツ理想主義と自然科学との総合が試みられた。それが人間形成の基盤となることが期待された。(中略)しかしドイツ理想主義は第一次世界大戦で崩壊した。自然科学は——基盤、目標、そして希望に関して——重大な危機に向かって滑っていった」(VT30)。今までの精神的基盤であったキリスト教とドイツ理想主義が崩壊したあと、それに代わる自然科学は、生の基盤も目標も希望も、またいかなる価値をも提示することはできない。

第一次世界大戦は、社会の基盤の崩壊を意味するものであったにとどまらず、シュナイダーにとって、すでに彼自身の内に進行していた生の基盤の崩壊を露にするものでもあった。彼は戦争直後の数年を振り返ってこう書いている。

幸福は、沈没、消滅、没落のなかにしかなかった。歴史の破局がどれほど私を動転させ、震撼させるものであろうとも、それは私に近しいものであった。なぜなら、それは私の内にあったからである。私は実際、自分の支えとなる基盤を見いだせなかった。国家あるいは家庭という基盤も、道徳律、あるいは信仰という基盤も。信仰は知らず知らずのうちに私の手の間からこぼれ落ちていた。しかしそれを失って残念だとは思わなかった。もともと信仰をもっていなかったのだから」(VT22)。

シュナイダーの父はプロテスタント、母はカトリックであった。子どもの教育は両親の取り決めにより、もっぱらカトリック風になされたものの、それほど厳格なものではなく自由なものであった。しかし信仰の違いは重大な意味をもっていたとシュナイダーは考えている。両親の間で神学の違いが重要な意味をもっていたのではない。問題はもっと密かなところにあり、信仰とその形によって決まってくる人間のあり方全体の違いであった。「われわれは、まさに最も個人的な世界において、われわれの国民が経験したのとは別のものを経験することはできない。すなわち、救いを求める戦いにおける分裂という悲劇。十字架のもとにおける対立」(VT29)。この悲

劇的な対立が彼の育った家庭に存在したことになる。彼は自分の生を30年戦争にたとえている(VT28)。

さらに彼の心を悩ませたのは、陰鬱な気質の父親と陽気で熱しやすい母親の両者から受け継いだ気質の対立であった。二つの気質のうち、父親の方が優位を占め、シュナイダーは生涯、憂鬱という重い遺産を背負って生きることになる。

しかし彼を憂鬱にしたのは、単に遺伝的な気質ばかりではないように思われる。大事な催しがある週にはありとあらゆる国の旗が翻り、世界の各地から集まる人々の華やかな社交と外交の場となる彼の家で、彼は自分の居場所を見いだすことができず、疎外感と孤独に苦しめられた。少年シュナイダーは、ホテルである父の家で、あたかも自分が無数の客の一人であるかのように感じた。客たちや雇い人の目を逃れようとしても、いつも彼らの目にさらされていた。自伝『曇った日』のなかでシュナイダーは、「ホテルは故郷ではない」(VT16)、「ドアがいつも開けられている家、壁が厚くない家には家族は存在しえない」(VT16)と書き記している。また、バーデン・バーデンに関する小論のなかには、実に興味深い文章が見いだせる。「去らなければならないという憂鬱が私の血のなかに宿っていました。というのも私は、いつもトランクが転がり、馬車が急いで立ち去るのを見ていたからです。はかなさと私たちの歩んだ道の痕跡のなさほどに確かなものは私には存在しませんでした。絶えず部屋と食卓が新たにしつらえられ、この前は誰がそこで眠り、誰が食事をしたのか誰も尋ねませんでした。私の周囲の生活集団は毎日変化しました。そして私は、自分自身の不変さを信じる根拠をあまり持ち合わせていませんでした。そしてとうとう、私たちの家族が一世紀のあいだ客となっていた家と庭は消滅してしまいました¹⁶⁾」。このように彼が置かれていた特異な環境が彼のなかに、故郷喪失、余所者、根無し草といった意識を育て、孤独、はかなさ、悲しみ、そして「底無しの淵への墜落の感情」(VT18)を募らせていった。

実科学校を卒業後、彼は市民生活を築こうと試み、二度の挫折を経験する。最初は農業の実地見習いとなり、その後ドレスデンの印刷屋に勤めたが、仕事に何の意味をも喜びをも見いだすことができなかった。さらにインフレによる生活苦が彼を襲った。彼は二年間、寒さと飢えに苦しめられ、温かい食べ物をとることができなかったと語っている。その頃のことを報告する彼の文章では、インゴ・ツィーマーマンも指摘しているとおり、町並みも、工場も、仕事も、そこで働く人々も、すべてが彼の心のなかと同じ灰色の色調を帯びている¹⁷⁾。時は春、しかし、あふれるばかりに花を咲かせている自然のなかに彼が見たのは、「死の意志」「目標のない生の祝祭」(VT47)であった。「＜これが最後だ＞ということが一つ一つのバラを輝かせる。そしてもしかして一つ一つの顔をも輝かせるのかも知れない」(VT48)と書いている。さらに、偉大なドイツ音楽から聞こえてくるのは、死の陶醉の言葉と誘惑の声であった。そのような彼に、死への誘いからかうじて免れさせてくれたのは読書であった。「仕事に行くには、ドレスデンの郊外の通りを歩いていった。その通りの限らない憂鬱が私を捉えて放してくれなかった。市街電車を降りる間際まで、私は本にかじりついてた。昼休みもふたたび本にかじりついてた。仕事は死んでいた。

生は不可能であった。外面的にも、内面的にも無意味であった。まるで手の間から消え去ってゆき、最も必要とするものすら買えなくなった紙幣のように¹⁸⁾」。

第一次世界大戦直後、ホテルの経営に行き詰まった父親はホテルを売った。しかしその代価は戦後ドイツを襲ったインフレで無となり、妻は彼を見捨てて去った。1922年4月8日、父は自ら命を絶った。それはシュナイダーにとって大きな衝撃であった。父の苦悩を推し量れなかったことが心を苛んだ。間もなく彼自身も、鬱病と生の不安が募り、ついに精神的に破綻し、自殺を企てたが、不成功に終わった。その後さらに、22歳年上のアンナ・マリア・バウムガルテンとの愛の挫折を経験する。

このように没落の時代にあって、生の価値と意味と方向を見いだすことができず、深い喪失感のうちに自ら命を絶つことに唯一の人間の自由を見いだしていた「生まれながらの自殺者」(VT 47)シュナイダーが、生きる意味と勇気を見いだすのは、読書をとおしてのウナムーノとの出会いであった。生を悲劇的なものと定義しつつ、なおかつ悲劇的感情と苦悩を積極的に担って生きることこそ真の実存のありかただとするウナムーノの思想のなかに、シュナイダーは、奈落に落ちてゆく自己の存在証明を、そして、「けっして宥和されることのない葛藤としての、悲劇としての生を生きる勇気」(VT52)を見いだした。

1926年12月13日、23歳のシュナイダーはスペインの有名な哲学者であるウナムーノに手紙を書く。「私はあなたの『生の悲劇的感情』という書物を読んで以来、あなたが私に影響を与えないで過ぎてゆく日は一日もありません。その表題からしてすでに私をあなたの書物に引きつけました。私がほのかに感じ取ったことは、この書物の背後に、私の生の最も固有な秘密に触れることのできる人がひそんでいるのではないかということでした。私はこの書物をすでに三度読みました。そしてあなたが話されるに違いないと思われることを私が前もって知っていることがしばしばありました。すべては用意されて、そしてあなたの言葉を待っていました。私が生きるなかで感じている内的な不確かさと、私にのしかかる外的な重い圧迫にもかかわらず、世界をあなたのように見るひとりの人間が私と時代を共にしてくださっていることを知ることは、私にとって深い慰めです。今どれほど不自由であっても、もしかして自由への途上にあるのかも知れないと感じます。(中略)私があなたに最も感謝することは、哲学を概念の専制から解放してくださったことと、人間カントを発見させてくださったことと、解決不可能な葛藤に立ち向かう勇気と、不協和音の生産性への信頼です¹⁹⁾」。

この手紙は、シュナイダーの現在の危機的状況とそこからの脱出の可能性、およびその方向性を暗示しているという意味で極めて重要である。とりわけ不協和音、すなわち矛盾・対立・葛藤がもつ生産性への信頼が今後のシュナイダーの歩みの指針となる。とりあえず彼はイベリア半島への旅が自由への道の出発点となることを予感した。

さらにシュナイダーはウナムーノを読むことによって二つの示唆を受けることになる。その一つはポルトガルへの関心であった。ウナムーノの『冒険と幻(Andanzas y Visiones)』を読むことによって、彼はポルトガルの国民性とその歴史のなかには「自分の魂の風景」と同じものが

あること、そしてポルトガルの没落と自己の内なる没落の問題を重ね合わせることをとおして、それを克服する道が開かれることを予感した(VT53)。二つ目の示唆は、歴史に目を向け、歴史のなかで生きることであった。自伝のなかでこう書いている。「個としての自我に生きる目標と意味を探っても、その自我は致命的である。そのことを私は経験してきた。しかし、自我は歴史のなかに織り込まれることによって初めて耐えうるものとなる」(VT54)。個人としての生は無であり、そして自己が孤独な存在であるかぎり生は担いきれないほど重い。しかし、個が歴史のなかに組み込まれ、参与し、歴史における自己の使命を自覚するとき、生は意味あるものとなる。ここからシュナイダーの新しい道が始まる。それは、「結びつきの喪失から結びつきへの道、主観的な孤独から歴史的なものへの道」(VT9)である。

3. 過去と現在の同一化

シュナイダーは1928年8月から1929年2月にかけてポルトガルとスペインに滞在する。そしてこの間のポルトガルでの経験が彼にとって、実際に、歴史のなかに生きはじめる出発点となった。「永遠の王冠(Die ewige Krone)」のなかで次のように書いている。「ポルトガルにおいて、つまり海外に進出してゆく16世紀のポルトガルにおいて、私の経験、私の心的ありようを表現する可能性を見いだした。耐えがたい主体的なものが客体化されているのを見いだした。歴史的なものが、一種の救済であること、包括的な生内容への急激な移行であることが私に少しずつ分かりかけてきた²⁰⁾」。この滞在中に彼は、「ひとりの人間がもしかして生涯において一度しか経験できないような経験」(VT58)、そして生涯に影響をおよぼしつづける経験を二度経験している。この全存在が震撼されるような経験をシュナイダーは、「一種の総体的圧倒(eine Art von Generalüberwältigung)²¹⁾」と呼んでいる。それは、ベレンのヒエロニムス修道院の右側の礼拝堂とエスコリアールのフィリップ二世の臨終の部屋において起こった。前者については『ポルトガル ある旅行記』と「永遠の王冠」と『カモンイスの苦悩』の三箇所にて記述されている。ここでは「永遠の王冠」から引用する。

リスボン郊外のベレンにあるヒエロニムス修道院には、十字架上のキリスト像の下方にセバステアン王とガマとカモンイスの棺が置かれているが、その場所に、ポルトガル国民が、そして私自身が経験し、両義性という深淵と迷路のなかにおちいる原因となったすべてのものが存在しているのを私は見いだした。遙かな地の果てにおける生、大西洋の岸辺における生、無意味の闇を前にしての生がここに懐胎され、確定され、具現されていた。没落した国家はここでその言葉を見いだしていた。墓場のない使者たちは彼らの名誉を見いだしていた。(というのも、王の死体はアフリカの砂のなかで行方不明になったからである)。本来の歴史はカモンイスが響かせている偉大さをもっていなかった。それは偉大ではあったが、同時に犯罪と欠点と、さらに夢へのたえざる逃避によって損なわれて、嘆かわしいものでもあった。

まさにカモンイスがそのことを立証した。沈んでゆく船の上で彼は美化する歌、堅固な歌をうたいはじめる。苦悩のなかから燃え上がる歌を²²⁾」。

この経験からシュナイダーはカモンイスの作品と運命について書く着想を得たのであるが、ヒエロニムス修道院の礼拝堂は、シュナイダーに、ポルトガルの発展と最盛と没落を同時に、しかも地球規模の広がりをもって総観的に見ることを可能にしたと言える。しかしそれは現在から切り離された過去の出来事として見ているのではない。そうであるならばシュナイダーを圧倒する経験とはなりえなかったと言わなければならない。彼は、そこに彼が生きている世界と自己の没落、および生の問題性を重ね合わせて見ている。さらに、後に述べるように、彼は苦悩のなかから燃え上がるカモンイスの歌に没落の克服を見ているのであるが、そうであれば、シュナイダーは、彼が置かれている現在の没落の克服をもそこに見ていることになる。すなわち歴史のなかに未来をも見すえていることに。したがって歴史を見ているシュナイダーの眼にあっては、過去と現在と未来が一つであると言える。

歴史とのこのような係わり方をペーター・ベルクラールは的確にも「過去との完全な同一化」と性格づけ、次のように述べている。「シュナイダーは過去のものに訪問客のように近づくのではない。過去の証拠を検査官や予審判事の眼で観察するのではない。彼はむしろ、われわれには説明しづらい仕方で、歴史の内部に入り込んでいる。歴史に対して、われわれの悟性的な思考には理解しづらい神秘的な関わりをもっている。彼は過去と完全に自己同一化しつつ呼吸し、生き、書く。そしてそのことによって過去はまさに＜かつて在ったもの＞としての性格を失う。歴史はシュナイダーにとって永続的な現在となる。すべてのものは同時的である。伝統的な観察にとっては年代順に前後に並んでいるように見えるものが、シュナイダーにとっては並列的に並んだ現在となる。(中略)彼は、霊的にも精神的にも身体的にも歴史空間のなかに住んでいる。その歴史的空間は彼にとっては、われわれにとっての日常の台所や居間よりも濃密で現実的である²³⁾」。

歴史的なものとの同一化はどのような場合に生じるのであろうか。シュナイダーは後年、「歴史的なものと主体的なものとの間の境界線はない。(中略)時代はわれわれの内では生じる。それゆえ、時代に対してわれわれ自身の最も個人的な事柄として責任を負わなければならない」(VT 10)と語っているが、政治的な交渉と社交の場であった有名なホテルに出自をもつ彼には、幼少のころから世界と歴史の動きに対する関心が養われていったものと思われる。さらにウナムーノの『冒険と幻』のなかのコインブラ論文から歴史のなかに生きる意味と責任とを喚起された。しかもそれが、自己喪失に悩む彼の救いになるほどに大きな出来事であったことをわれわれは忘れてはならない。以降、コインブラ論文のなかの「いや、いや、そうではない。日々をのんきに暮らすことは無である。われわれは世紀のなかへ入って生きねばならない²⁴⁾」という格言がシュナイダーの導きの星となる。このようなシュナイダーが、自分の置かれている時代、祖国と世界、および自己の実存の問題を人並みはずれて真剣に受け止めつつ、かつ真剣に受け止めるゆえに苦悩しつつ歴史を見た場合に、同じ問題をかかえる過去の時代と人物に鋭く感応し、同一化するも

のと考えられる。シュナイダーの作品のほとんどすべては歴史に素材をえたものであるが、そのほとんどすべてがこの同一化から生まれたものであると言える。ここでは代表作からその幾つかの例を示すにとどめておく。①第一次世界大戦前後のドイツと16世紀のポルトガルとの同一化から生まれた『カモンイスの苦悩』では、没落とその克服とが描かれる。②ナチス時代と紀元前半世紀から産業革命までのイギリスの歴史の同一化から生まれた『島国(Das Inselreich)』では、正義に基づかない偽りの権力の興亡のなかに「審判としての歴史」が描かれる。③ナチスによる侵略戦争と南米におけるスペインの征服戦争との同一化から生まれた『カール5世の前に立つラス・カサス(Las Casas vor Karl V.)』では、侵略戦争の悪と人種差別・迫害に対する抗議が描かれる。④冷戦時代のヨーロッパと13世紀末のヨーロッパとの同一化から生まれた『大いなる断念(Der große Verzicht)』では、権力闘争における罪の連鎖と平和の問題が描かれる。

もし歴史を現在と切り離して取り扱うならば、それは意味をもたない。断片的な無数の出来事 of 集積にすぎないものとなるか、あるいは空想的かつロマンチックに、ときには牧歌的に懐かしむ逃避の対象にすぎなくなるであろう。歴史に意味が生じるとすれば、それは現代の問題との交点からでしかありえない。このような歴史理解を説明するためにシュナイダーは金本位制に基づく金融理論の比喩を用いる。「過去の墓が永遠に妥当する宝を蔵しているという希望がなければそれを開けても無駄である。すなわちその宝とは、どの世紀においても通用価値を失わず、新しい評価のスタンプを受け取り、かつ要求する金である。それは古い、尊重すべき金であるが、その意味は新しい²⁵⁾」。シュナイダーは歴史には永遠に妥当するものが包含されていると考えている。それは金融システムにおける金に相当する。そして金融システムにおいて金が現実作用するものとなるためには通貨が必要であるのと同じように、歴史の宝に今日的意味をあたえるものが必要である。そして、その通貨に相当するものとは、現代の問題意識から新しく読みなおされた歴史解釈ということになるであろう。シュナイダーは「歴史はあらゆる時代に奉仕する準備をしている²⁶⁾」と言う。そして彼は、歴史から奉仕する力を引き出す能力、古い眠れる歴史を現実作用するものに変えることのできる特異な能力をもっている。そのような人間にとっては歴史はわれわれの背後にあるのではなく、われわれの横に、さらには、われわれの前方にもあることになる。

4. ポルトガルの没落とカモンイスの生

ポルトガルは12世紀から13世紀にかけて、いわゆるレコンキスタ運動によってイスラム勢力を放逐し、1297年には国家統一を実現し、ほぼ現在の国境を確定した。その意味で全ヨーロッパで最も古い国であると言える。大航海時代には、スペインとともに最も早く海外に進出し、インドをはじめ東南アジア諸島、アフリカおよびブラジルに植民地を作り、世界帝国を築き上げた。マヌエル幸運王の時代、ヴァスコ・ダ・ガマがインドのカリカットに到着したのは1498年5月である。1500年にはブラジルを発見している。しかし繁栄は長くはつづかず、すでに16世紀の中頃に

は経済危機と人的危機のために国運は衰退へと向かう。そして1578年、セバスティアン待望王のアルカセル・キビールにおける敗北により、ポルトガルは決定的な打撃をこうむる。1580年にはついにスペインに併合され、ポルトガルの名前は以後60年間にわたって歴史から消える。したがってポルトガルの繁栄は長く見積もっても50年程度である。

カモンイスはヴァスコ・ダ・ガマが死んだ1524年に生まれ²⁷⁾、スペインのフィリップ王がポルトガルを征服する数週間前に死んだ。すなわちポルトガルの繁栄の時代に生まれ、没落の時代を生き、ポルトガルの死と同時に死んだことになる。彼は「ルネサンスと新大陸発見という二つの偉大な運動の終りに、引き潮のなかに立っていた²⁸⁾」(C48)。

カモンイスの生涯については、残存する資料が少ないために不明な点が多く、生涯をたどることはいへん困難である。生年も、出自も、受けた教育も、北アフリカとインドへの出征の理由も、本当のところは不明である。シュナイダーが参考にした文献も、推定や想像に基づくものが多かったと考えられる。さらに、シュナイダー自身が、大胆に推測し、独自の、極めて主観的ともいえる解釈を加えている。彼の関心は、カモンイスの生涯の実証的研究ではなく、もっぱら、自己の生および時代と関わらせた解釈だったからである。そして、われわれの関心もまた、シュナイダーの作品とその素材であるカモンイスの生涯の伝記的事実の照応関係いかにあるのではなく、シュナイダーの生と文学にとってカモンイスがどのような意味をもっていたかを突き止めること、すなわち、どのような意味においてカモンイスがシュナイダーの生涯の「船首像」になったかを明らかにすることにある。

カモンイスは自分の誕生については恐ろしい悲運についてしか語っていない。彼は命を与えられた日を、老年になってもなお呪うことになる。シュナイダーはこう書いている。「一人の人間が、自分が存在することのできない世界へと足を踏み入れる。なぜなら、彼には自分が足を下ろすべき地面と、呼吸すべき空気とが欠けているからである」(C50)。

実証的な研究によると、カモンイスの幼少年時代についてはまったく不明であると言われている²⁹⁾。しかしシュナイダーによると、幼児カモンイスが受けた養育が彼の生涯にとって決定的な意味をもっていたとされる。彼は、カモンイスの諸作品から愛の性質を次のように読み取る。

カモンイスを育てた女たちは、赤子のカモンイスがむずかると、揺りかごのそばでポルトガルの「愛の悲しみの歌」を歌って聞かせた。彼は、その憂鬱な憧れのひびきを聞きながら眠り込んだ。今日もなおポルトガル人によって最も固有の財産として讃えられている歌は、「謎めいた苦痛のなかで震える」が、そこに聞き取ることができるのは、「苦悩と苦悩への意志」である。彼らが愛のなかで求めるのは幸福ではなく、苦悩、嘆くための苦悩である。なぜなら、「嘆きのなかでのみ心の豊かさのすべてが開花するからである。この世も生も、その最大限において感受されるのは、嘆きのなかにおいてである。この苦悩のなかで、魅惑的で破壊的な快楽が震えている。この悲しみの覆いのもとで諸感覚は互いに一体化し、致命的な甘美さのなかで苦しみ、そして惑溺する」(C52)。

そのような歌を聞いて育ったカモンイスの愛もまた、その根底において、同様の情動、すなわ

ち破滅と苦悩への意志によって規定されているとシュナイダーは述べる。幼い頃にひそかに彼のなかで点火された情熱は破壊的な性格をもっている。それを、シュナイダーは、カモンイスを育てた乳母のミルクには毒が含まれていた、その乳母は女性の姿をした野獣であったと表現する。乳母がカモンイスにとって女性の原像となる。実際、カモンイスは生涯に二人の女性を愛するが、二人とも乳母の似姿である。乳母に似た女性しか彼をひきつけないからである。「カモンイスは、彼に三度出会った一人の女性しか愛さなかった」(C59)。カモンイスの愛は、現実のあるがままの女性を愛するのではない。

それは、恋人の内に、単に彼女自身だけでなく、まったく、愛する価値のあるすべてのものを要求する。すなわち限りなきものと手の届かぬものを。それは、完全なもののなかへ流れ込むことを欲する魂の喪失感情である。それは、測りがたいものを求めるゆえに、すでにそれ自体の内に絶望を含んでいる」(C61)。

このような愛を説明するためにフランツ・バオマーは、プルーストの「一人の人物への排他的な愛ですら、いつも、何かある他のものを求める愛である」という言葉を引用している³⁰⁾。カモンイスの愛は、現実の対象を通り越して、理想を見ているという意味で、理想主義的、あるいは超越的と呼ぶことができる。また、そのような愛は成就されることは絶対にありえないという悲劇的な性格をもっている。彼は彼女のために生きているのであるが、この愛する男は、根本的には完全に孤独である。彼は自分をあざむいて自分は幸福だと思い込もうとする。しかし「現実が彼の求めるものを拒むときには、彼はそれが彼の欲求にマッチするように現実を作り替える」(C65)。「空想の幸福は、絶えず、究めがたい現実の岩にぶつかって粉々に砕け散る。絶えず彼はその幸福を立て直す。彼は自分をあざむくことを糧にして生きている。しかし、彼は生きたいと思うがゆえに、このあざむきを断念することはできない。絶え間なく彼は落下に次ぐ落下に苦しめられる。さらに、自分をあざむこうとする不幸な衝動を呪う」(C62)。彼の内なるこの最も深い衝動は、破滅への意志、苦悩への意志である。シュナイダーによると、「カモンイスは苦悩の最も偉大な詩人である」(C64)。さらに、シュナイダーは、カモンイスの諸作品のなかに「肯定よりも否定の方が深い快楽である」とする「南方の惑溺的なひびき」、「苦悩を通して獲得された栄光」(C66)を聞き取る。カモンイスは破滅と苦悩を求めて生きながらも破滅しない。なぜなら、「彼は苦悩のなかに、敗北のなかに栄誉を発見する」(C66)からである。この苦悩と敗北のなかに栄誉を発見することは、単にカモンイスの愛について言えるだけではなく、彼の文学作品について、さらには彼の生涯全般について言えることであって、カモンイスにとって極めて重要なことである。その意味をも含めて、後に再び述べることになる。

シュナイダーの愛にもカモンイスと類似の性質が認められる。1922年、シュナイダーは自殺を図ったあと、兄が下宿しているところに住居を移す。家主は41歳の女性、アンナ・マリア・バウムガルテンである。彼女は生を模索する19歳の青年のなかに真摯さと豊かな才能を認めるととも

に、彼を愛し、精神的にも物質的にも困難の内であったシュナイダーを助ける。そしてシュナイダーは、彼女のもとで暮らすようになった最初の一時期、この22歳年上の女性を愛したことがあった。彼は日記に、「私は自分があのかリスト昇天の祝日、そしてさらに数日、もしかしてそれにつづく幾週間であったかもしれないが、幸せであった。かつてなく幸せであった。しかし私はこの幸せの代償をどれほど支払ってきたことだろう。(中略)しかし、彼女は私を愛している。彼女は見捨てられている。私は彼女のことを思うと心が痛んで仕方がない³¹⁾」と書いている。この二人の悲しい関係を、後に彼は「経歴」という詩のなかで次のように表現している。

近くを見ると、遠くが輝いて見えた。

私は数知れぬ町々を歩くことができた。

そして多くの素晴らしいものを手に入れた。

しかし私の心は南国にあった。

ああ、私には、無しで済まさなければならぬことが多かった。

幸福な時にもけっして悲哀を忘れなかった。

うち震える胸に、ひとつの胸を抱きしめること、

それはこの世では私にけっしてかなわぬことだった³²⁾。

シュナイダーはかつて愛し、後に愛せなくなった女性と、生涯、結婚することなく共に暮らす。幾度となく企てられた旅行のさいには、アンナ・マリア・バウムガルテンは必ず同伴している。彼女は彼を愛しながらも、その愛を自分で押さえつけて消し去った。そのような彼女を彼は高貴とよび、彼女を尊敬し、病弱な彼は彼女を頼りにもした。彼はこの女性に生涯誠実をつらぬき、死後、彼女を総相続人に指定している。両者は、この関係のなかで共に孤独と苦悩を経験した。シュナイダーは「私はかつて彼女を深く愛したことは確かである。彼女のために死ぬこともできたほどである。しかし、不思議なことに私は彼女において苦痛を愛したということであった³³⁾」とも書いている。このようにシュナイダーの愛にも、カモンイスにおけると同じように、理想主義的で超越的な性質と、苦悩への意志が認められる。しかし苦悩と超越との関係は表裏一体をなしているようにわれわれには思われる。「ある一人の女性に対する否定的な関係は、男性の内に無限を求めさせる³⁴⁾」というキルケゴールの言葉にもあるように、苦悩が先にあって、そこから超越への志向が生じてくるのか、あるいは、より高きもの、より美しきものを求める超越への意志が先にあって、その意志のゆえに現実が色あせ、苦悩が生じるのかは決定しがたい。超越への意志が苦悩を生み、その苦悩がさらに超越を求めさせ、その超越への志向が、苦悩をいっそう増大させるというように、両者は互いに他を強化する関係にあるように思われる。また、シュナイダーが用いる「苦悩への意志」という一見奇異に思える表現も、いわゆる心理的な志向としてのマゾヒズムのことを指しているのではなく、すでに述べたように苦悩がわれわれの心を豊かにす

るとともに、苦悩が超越をもたらすという、苦悩に対する積極的な価値評価を内に含んだ表現であると言える。

カモンイスは1552年に、役人の地位につく望みがかなわぬ鬱屈が爆発したためと推測されるが、リスボンの街頭で傷害事件をおこして、1年間牢に入れられる。インドで兵役につくという条件のもとで釈放され、以降16年間、彼は自分の本性や詩人でありたいという願望とはまったく相容れない生活を送ることになる。

この歩みは彼がみずから一切の希望を放棄することと同じ意味をもっていた。「生まれつき彼のために定められていた女性から彼を引き離し、深く憎んでいた戦争へと駆り立てたこの決心が、破滅的なものであることを彼は疑わなかったし、海と陸が二人を隔てているあいだに彼を消耗させるに違いなかった」(C75)。にもかかわらず、彼にそう決心させたものは何であろうか。それは「彼の生来の深い絶望、自己自身に敵対する傾向である」とシュナイダーは解釈する。結局彼は16年間、東南アジアに止まることになる。

1553年9月にインドのゴアに到着したカモンイスは、3年間一兵卒として過ごし、その間にインドのマラバル海岸、紅海、ペルシャ湾などで戦闘に参加したと推測される。ついに平民となる希望がかなえられるように思われたが、マカオへ赴く途中、モルッカで身柄を拘束され、再び兵役を強いられる。インドにおけるポルトガル人の愚行を厳しく批判したことで、人々の怒りをかったためと思われる。2年後の1558年頃、マカオに到着し、そこで不在の人や死亡した人たちの財産管理人をしながら、約2年間を、叙事詩『ウズ・ルジアダス』のために費やす。しかし新たに中傷が原因で、囚人としてゴアへ強制送還された。その途上、彼はメコン川の河口で難船にあい、財産のすべてを失う。残されたのは水に濡れた『ウズ・ルジアダス』の原稿のみであった。ちなみにこのゴアで彼は恋人の死亡の報せに接する。彼女がこの世を去って6年目である。この間、彼は死者に手紙を書きつづけていたことになる。ゴアでは一度は自由の身となったが、極貧ゆえの債務不履行から再び獄につながれたと言われている。67年、友人に助けられ、その友人の船でモザンビークまで行く。そこでの生活は、人の情けにすがって生きるような状態であった。インドで彼と親交のあった友人たちが、インドからポルトガルへ向かう途中でモザンビークへ立ち寄った。これらの友人の援助を受けて負債を返済し、彼らの船で69年によく帰国することができた。彼自身が「祖国からの追放」とみなした16年間の後、ついに彼は、「国民に自分の作品を手渡し、そして死ぬために」(C105)リスボンに戻ってくる。帰国後、72年に『ウズ・ルジアダス』を発表し、同年、セバスティアン王から、その功勞として3年間にわたって年金を下賜されることになった。年金は3年が過ぎたあともひきつづき下賜されたようであるが、豊かな生活を送るには十分ではなかったと思われる。最晩年は、ムーア人居住地区の小さな家に住んでいた。恐らく、当時蔓延していたペストに罹り、どこかの満員の病院へ運ばれたようである。そのとき、「彼は、メコン川河口の難船のときと同じように、手に自作の詩集しかもっていなかった。彼はそれをたった一つの遺産として、サクラメントを授けてくれた神父に手渡す。彼は自分の体に掛けるものをもっていなかった。友人たちはこの死者に一枚の布を贈る。その布に包まれて彼は葬

られた」(C163)。彼は1580年6月10日に死んだと信じられている。どこに埋められたかは不明である。同じ年にポルトガルはスペイン軍の攻撃を受けて敗北し、スペインに併合される。祖国を愛したカモンイスは、「祖国のなかで死ぬだけでは満足せず、祖国と共に死ぬことになった」(C163)。このように、カモンイスの生涯と、彼の国民の発展と没落過程との間には注目すべき呼応関係がなりたつ。さらに、われわれは、没落の時代を没落市民階級の一員として生きたシュナイダーとカモンイスの間に深い呼応関係があることに注目すべきであろう。

「カモンイスの生は下へと向かって成長し、暗い国でしか呼吸することができない」(C75)、とシュナイダーは書いている。カモンイスは苦悩と悲しみと憂鬱の内に生きている。そして「憂鬱と悲しみの悲劇的な雲のもとには死が潜み隠れている」(C77)。祖国と恋人から引き離されてこの上なく深く、恐ろしい落下を経験したカモンイスは、インドへの航海中、死への誘惑に襲われるが、それを辛うじて断ち切る。インドでの兵役では何度も死に直面し、ポルトガル人の卑劣極まりない悪行に、彼の心は致命的な傷を受ける。しかしながら、「他の人々を押さえつけるものが、彼を持ち上げるというのが彼の生の秘密である」(C76)。彼は、われわれを意気消沈させるはずの苦悩と悲しみと憂鬱と死の深みに、われわれを高める力を、完成の約束を見いだす。(ここでいう「完成」の意味については後に述べる)。自身、絶えず死の誘惑と闘いながら辛うじて生きていたシュナイダーだけに、ここの解釈は作品中の圧巻である。

死は、実現不可能性の諸領域を粉碎するゆえに、永遠なる実現の約束を自己の内に宿している。高昇としての死は、かの高める作用をもつ苦悩の経験と類似している。死は最も強い原動力である。すなわち生の極限にまで追い詰められて、生の炎は最も情熱的に燃え上がる。死の前では、つまらぬ考えはすべて消え去る。あらゆる弱さは死の前で粉砕のように吹き飛ぶ。いかなる生も、死がそれを更新することができないほどに、それを再び煽り立てることができないほどに気が抜け、使い果たされ、危険にさらされてはいない。死の力のすべてを知っている人間は、自分自身のために巨大な力を獲得している(C77)。

カモンイスはいわば逆向きに生きていた。確かな生のために、確かな死を所有していたことができる。そのような彼にとっては、この世の中のすべての否定は肯定となる。苦悩と憂鬱と悲しみはプラスの価値をもち、矛盾や対立は生産的なもの、死は生に仕えるものとなる。「この救いは破局の上に直に打ち立てられている。カモンイスはおのが悲運を糧にして生きている。彼は、なぜ死なないのかという問いに対してこう答える。〈絶えず死のかたわらにいるからだ〉と。それはぞっとするような生であるが、しかし、壊滅させられ得ない生である」(C77)。シュナイダーは、ウナムーノをとおして、実存は生と死の闘いであり、死に直面しての生の情熱的な肯定であること、および葛藤とその苦悩が生産的な意味をもつゆえに肯定すべきことを教えられたが、その教えられたとおりのものをカモンイスに見いだしたと言える。

後年、シュナイダーはキルケゴールについてのエッセーのなかで、『人生の諸段階』から引用し

ながら次のように述べている。『『おお、死よ。私は思うのだが、お前は不当な扱いを受けている。お前は生にどんな意味をも与えることができないというのか』と、このデンマーク人は書いている。まさにこの箇所が、私が『然り』ということ学んだ場所である。絶望と憂鬱が行為に変えられた場所である。受難が能動的にならねばならなかった場所である³⁵⁾』。

5. 没落の克服

インドおよび東南アジア諸島での16年間、カモンイスは、自分の資質や詩人でありたいという願望とはまったく相容れない生活を送ることになる。戦争に対する測り知れない嫌悪を抱きながら兵士として戦わなければならなかった。すでに述べたように、国に残してきた恋人への情熱は破壊的で悲劇的なものであった。さらに、彼が実際に目にし、体験したのは、原住民に対する恐喝と略奪と虐殺という残忍な現実であった。植民地の荒廃は急速に進んでゆく。ポルトガル人の腐敗は止まるところを知らない。「ここ植民地では人間は荒れ狂う。いかなる束縛をも感じなくなると、赦免が与えられるとたちまち、人間は本性を現し、貪欲で冷酷となる。あらゆる卑劣な行為に酔う」(C37)。この現実を前にして、彼の受けた衝撃は言い知れない。そればかりではなく、彼はポルトガルの拡大のなかにすでに没落を見ている。「国民の運命とこの上なく深く結ばれているこの詩人は、表面で騒いでいる人々が上昇していると思っているなかで、滑り落ちてゆくを感じ取っている」(C108)。しかし、彼は国民の悪と没落の現実を見据えながら、しかも「この愛国者は、その過酷な試練を乗り越える。彼の愛の根が岩を貫かないなら、彼は死ぬ」(C94)。では、どのようにして岩を貫くのであろうか。

彼は事物をあるがままに受け取ることができない。なぜならそれらは彼に致命的な打撃を与えるからである。それゆえ彼は、それらを彼が必要とするものに成るように作り替えなければならない。彼を取り巻くすべての現実を、彼は、自分の情熱的な詩作という熔解する火のなかに投げ込む。するとついに現実とは、別のものとして、あるいはむしろ唯一の「現実」として、彼が立てざるを得ない諸要求にふわしいものとなる(C95)。

「精神的世界のカーブは自由であり、この世の出来事から独立した動きをする。それは勝利のなかで落下し、没落のなかで上昇する」(C142)。希望喪失が深くなればなるほど、そしてこの世の事物が色あせてゆけばゆくほど、カモンイスは永遠のものへと、「理想というダイヤモンドのように硬い確かさ」(C136)へと上昇してゆく。「天が明るくなればなるほど、彼と齟齬をきたす地はますます暗くなる。下には罪の恥辱が、上には不滅の輝きがある。歯噛みをし、心を高ぶらせつつこのキリスト者は、彼の永遠の祖国へと入ってゆく。(中略)彼は自由である。神性のみが彼を支配する力をもっている。自分の内なる自然に完全に打ち勝つとき、彼は目に見えないものを経験するだろう。卑しい、目に見える世界のかなたに」(C136)。すでにわれわれはカ

モンイスの愛が超越的な性質をもっていることを見た。目の前の現実、それがどれほど美しいものであっても、彼の心を満たすに足りる魅力をもたず、現実の彼方に完全なものを求めつづけさせた。それと同じ心の動きがここにおいても認められる。醜い現実を前にしてはなおさらである。永遠のものに心を捉えられた彼は、現実の歴史の泥沼から理想を救い出し、その理想の鋳型にしたがってポルトガルと世界の歴史を作り替える。すなわち、ポルトガルの拡大のなかに残酷な植民地支配ではなく、異教徒たちを征服し、キリスト教の福音を世界に広めるという使命の遂行を見てとる。まず、レコンキスタによるポルトガル建国から大航海時代の現在にいたるポルトガルの歴史を、キリスト教の布教とイスラム教徒の撲滅の歴史と考え、神に仕えるポルトガル国民の輝かしい英雄的な事績をたたえる。叙事詩『ウズ・ルジアダス』では、古典悲劇におけるような一人の偉大な人物は登場せず、国民全体が一つの人格と見なされ、偉大な主人公となる。しかしポルトガルの使命は、過去の輝かしい歴史においてばかりではなく、没落の道をたどる現在も継続している。ヴァスコ・ダ・ガマのみならず、副王たちの海賊行為は、神の計画にしたがった前進として描写される。その前進のなかで、たとえば、ほかならぬ残酷非道のアフォンソ・デ・ソウザは、敵の海と海岸の浄化者として、最も偉大な英雄の一人として登場する。「詩人は挫けることなく血の川のなかを歩いてゆく。絶えず彼は荒れ果てた町々について、正しい裁きを下された〈残酷な罰〉について、死者で覆われた土地について、火事、煙について、大砲の轟きについて語る。彼が何百回となく経験した死の危険、死んでゆく友人たちの青白い顔に現れた死の反映、彼自身の負傷——それらを彼は最初は無意味な残酷さに見なしていたが——それらは、高い意味を要求し、歴史的現実を克服する」(C98)。

カモンイスが生きた時代の歴史的現実としてのさまざまな行為——これも作者自身によってポルトガルの歴史的業績のなかから意図的に選択されているのであるが——それらの行為の描写と、それらの行為を教会に対する滅私的奉仕としてたたえる詩行、この両者の矛盾のなかにシュナイダーは『ウズ・ルジアダス』の根本問題(C95)を発見したと言える。すなわち、シュナイダーの表現によれば、「素材と形姿との深い矛盾」(C95)、「素材と詩人との間の多数の深い亀裂」(C102)である。この対立の源はどこにあり、両者はどこで触れ合うのかを解明することが、『カモンイスの苦悩』を書かせた大きな動機となった。

現実の腐敗と没落に完全に反して、詩人は彼の平和の国を打ち立てる。すなわち、ポルトガル人による、ローマ帝国よりも偉大なキリスト教の第五世界帝国を打ち立て、不滅の勝利をたたえる。ここで支配しているのは、規律と冷静、勇気と賢明さ、忠誠心と犠牲心、神と真理への奉仕、すなわち騎士道的・キリスト教的精神である。各人は全体と意識的につながり、自分にふさわしい役割を果たしている。ここは「永遠の秩序の法則」が支配しているコスモスである。この国はまったく非のうちどころのない「完成」の光を放ち、より高い現実を表している。このような意味で、カモンイスはポルトガルの完成者である。

しかし、このようにして生まれた作品あるいは「完成」は、苦もなく容易に獲得されたものではない。この完成をシュナイダーは、「苦難を通して獲得された栄光」と名づけている。カモン

イスはポルトガルの栄光の世界を造り上げるが、彼自身は、歴史におけるポルトガル権力の犯罪と没落をくぐり抜けてゆかなければならないだけでなく、自分の身においても没落と死の危険と苦悩のなかをくぐり抜けてゆかなければならない。われわれが取り上げているシュナイダーの作品の完全な表題「カモンイスの苦悩あるいはポルトガル権力の没落と完成」はこのことを表している。ハンス・ナオマンが適切に指摘しているように、「シュナイダーは国民と国家権力の没落をカモンイスの造形の条件、彼の言葉によると国民の完成の条件と解釈している³⁶⁾」。すなわち、精神的な完成は、現実における没落という代償を通してはじめて獲得されてくる。したがって没落がなければ完成もないことになる。「国民は、ひとりの偉大な人間の作品によって永遠へと成長してゆき、彼を通して、与えられた使命を完全に果たしつつ、同時に滅亡してゆく」(C142)。シラーの有名な「ギリシアの神々」という詩の結びにもあるように、「歌にうたわれて不滅に生きてゆくべきものは、／この世では没落してゆかなければならない³⁷⁾」からである。ちなみに、カモンイスにおける創造の場合は、歌にうたわれる対象の没落という代償に、詩人自身の没落という代償が付け加わる。

ところで、このような理想は、夢想とどのように違うのであろうか。両方とも現実からは遊離しているように見えるが、シュナイダーは区別している。彼によると、理想は、ある人間、あるいはある国民の意志の方向を指し示している (C103)。個人と国民の最高目標としての意味をもっている。そして、それには必ず目標に向かっての努力と自己犠牲とが伴う。ところが夢想は、意志や努力とはかかわりなく、現実に対する責任を知らず、ましてや自己犠牲などは知らない。さらに、夢想は、この世とは連続的であり、この世の美化にとどまっているのに対して、理想は、この世における破綻と苦悩とを通り抜けた果てに、辛うじて獲得された彼岸の移ろわざるものである。したがって、理想は現実を変革せんとする強固な意志に支えられ、保障されたものであり、理想と現実はいかに密接な関係をもっている。しかし夢想は現実に対してそのような関係はもっていない。そこから、理想には、現実を裁く性質も含まれてくる。理想は、国民の行為を測る倫理的な尺度となる。

彼が至高の神の意志だと認識したこの理想は、彼にとって必然的に、自国民の行為を測る倫理的な尺度となる。彼は建てたあとで、吟味しはじめる。彼の熱意は怒りとなるほかはない。それゆえ、詩のなかを途方もない分裂が走っている。すなわち、教会のために見知らぬ大陸で死の危険に耐えるポルトガル人の、無私な従順を歌う詩行と、東方の誘惑のなかで墮落してゆく征服者のあらゆる悪徳を罰しつつ告白する詩行とである (C103)。

先に述べた「素材と形姿の深い矛盾は」は、とりもなおさず現実と理想の矛盾であり、両者の矛盾の間には、カモンイスの時代と祖国に対する責任から、あるいは祖国に対する愛から生じる底知れぬ苦悩が横たわっている。もしも祖国に対する責任あるいは愛がなければ、この矛盾は解消され、カモンイスの苦悩もなくなるであろう。それと引き換えに、『ウズ・ルジアダス』は、

現実克服の努力を伴わない陳腐な夢物語になるか、あるいは裁きを伴わない味気ない現実描写になるであろう。

カモンイスは自分を取り巻く悪と闘い、「その暴力行為に名前をつける³⁸⁾」。そして、旧約聖書の預言者のような警告の叫びを発する。「彼は部族の最高審判者である」(C104)。欲望に打ち勝てずに身をまかせている軟弱な世代に対して古き時代の強靱な徳を訴えかける。所有欲に対して財を軽蔑すること、名誉さえ軽蔑することを訴えかける。称号や名声に対して報いを求めぬ功績を訴えかける(C104)。このようにして、カモンイスの理想は、「人類の良心の覚醒を表している」(C100)。

このようにして、叙事詩『ウズ・ルジアダス』は、国民の犯罪を告発するとともに、国民の心に矜持を与え、良心の覚醒を促す作品となった。ポルトガルは、「外面的な最後の強さが破綻する直前に、その最大の詩人のなかで南中し、永遠に救われる」(C107)。国は没落しても、芸術作品によって永遠化された国民の偉大さは、没落の後も生きつづけることになる。それが——フランツ・バオマーも指摘しているように——美的芸術についての若きシュナイダーの確信であった³⁹⁾。そういう意味でカモンイスは祖国の没落を救った。それをシュナイダーは的確にも「墓碑銘を書く」という比喩で表現する。

ある国にとって、その名前と、かつてその国にあって感じ取られた最も偉大なものが移ろいゆかないならば、死はそれほど耐えがたいことなのであろうか。没落が永遠であるならば、それはいまだ没落なのであろうか。ポルトガルで生じたことはすべて、カモンイスからのみその意味を獲得した。たとえポルトガルが偉大であったとしても、彼によってなおいっそう偉大になる。彼の内に、かつてポルトガル国民を行為へと駆り立てた一切のものがある。行為となりえなかったものもある。すなわち窒息してなくなった憧憬、形成されるに至らなかった思想が彼の内にある。現実には成功しなかったかすかすの試みは、その動機のなかに生きつづけている。(中略)ある国民の没落は、詩人が墓碑銘を書くときに、みごとな代価を受け取ることにならないだろうか(C165)。

このように、カモンイスはポルトガルの運命の伝承者である。また厳しい裁き人でもあり、ポルトガルのあるべき姿を描いた完成者でもあった。さらに国民の代表者であった。「カモンイスはすなわちポルトガルであった」とシュナイダーは言う。彼は地理的にはコインブラからマカオまで、精神的には、レコンキスタによってポルトガルの基礎を築いたアフォンソ・エンリケス(1109?-85)からドン・セバスティアン(1556-78)までの全領域をくまなく歩き、ポルトガルの黎明から日没までのすべてを体験した。「一人の人間がこれほど十全な意味で全体の代表であったことは決してなかった。彼の作品には、国民の像のどんな陰影も欠けてはいない。彼とともにポルトガルは死んだ。彼とともにポルトガルは救われた。彼の声によってのみポルトガルは生きつづけている」(C164)。

さらに、カモンイスは作品を書くことによって祖国の没落だけでなく、自分自身の没落をも克服することができた。なぜなら、彼は、自分の生を、自分が属する国民の歴史のなかに組み込み、そのなかで墓碑銘を書くという使命を見だし、自分の生を意味づけることができたからである。「生が個しか問題にならない場合には、生は狭すぎる」(C82)。そして浮き草のように、存在の根をもたない。しかし、個としての存在の基盤が疑わしいものになればなるほど、「社会への移行」(C80)が必然的なものとなる。この点に関して、シュナイダーにも同じことが言える。生の基盤の喪失に苦しんでいたシュナイダーは、ウナムーノをとおして、歴史のなかで自己の責任を果たしつつ生きることを教えられ、それが彼の救いとなったことを、われわれは思い起こす。

後年、シュナイダーは、当時を回想しながら、「カモンイスの作品は、その浄化力ゆえに、ドイツにとっての一つの指針として、自己批判と自己更新として、不可欠な価値の一覧表としてハッキリと目の前に浮かんでいた⁴⁰⁾」と書いている。したがってカモンイスはシュナイダーにとって、単に過去の偉大な詩人であるだけでなく、彼の新たな生への突破口となるとともに、ポルトガルのみならずドイツにとっても、さらには人類にとっても指針となり、鏡ともなりうるものであった。今なお「世界に対するポルトガルの英雄的な遺産」(C108)である。それゆえ、カモンイスに対するグンドルフの低い評価に、憤りに近い不満を覚えたのももっともであると言わなければならない。

自伝『曇った日』のなかでシュナイダーは、カモンイスの功績にふれたあと、「没落の意味は、すなわち詩人が墓碑銘を書くということである。私は墓碑銘が書かれなければならない時がはじまったのを感じた」(VT54)と記している。ここで彼は時代に対して詩人としての自分の使命を自覚したと言える。事実、彼はその後、ナチスの独裁、第二次世界大戦、敗戦、東西ドイツの分裂、そして冷戦というドイツの困難な歩みのなかで、カモンイスを生涯の船首像としつつ、自身もまた墓碑銘を書くことに使命を見だして自己の没落を克服し、その使命を果たすことによって、実際に世界の没落を克服する役を担ってゆくことになる。彼もまた、伝承者として、告発者として、忠告者として、そして慰めを与える人間として歩むことになるであろう。

シュナイダーは、カモンイスに私淑しつつ創作者としての道を歩みだしたとき、彼は自分とカモンイスとの間に、運命的に深いつながりがあることを意識したにちがいない。カモンイスは、彼と同様に没落と闇のなかに生をうけた。にもかかわらず、屈伏することなく祖国と自分自身の没落を救った。彼はこのカモンイスに倣って生きようとした。1943年のソネット「カモンイス」のなかで、シュナイダーは次のように詠んでいる。リタ・マイレは、この詩は恐らく『カモンイスの苦悩』を書いた時期の気持ちを表現したものであらうと述べているが⁴¹⁾、正しい指摘だと思われる。

私はあなたの運命に魅せられ、あなたに倣って生きる。

そしてあなたの幸福と危険を感じる。

世界の崩壊のうちなる詩人以外の何ものでもない⁴²⁾。

カモンイスのメコン川の河口での難船を「文学の真のシンボル」であるとシュナイダーは見なしている(C115)。このとき、カモンイスは、すべての財を失い、作品以外のものは何も救えなかった。そして彼ほど文学のために多くを支払った人間はいない。財を失い、愛を失い、市民としての幸せを失い、片方の目さえ失った。シュナイダーがカモンイスに倣って生きようとしたとき、文学は彼から多くのものを奪うことを、大きな犠牲を伴うことを深く意識したにちがいない。しかし、彼が死ぬことを欲しなければ、自分にはこの道しか存在しないことをも知っていたにちがいない。

注

- 1) Reinhold Schneider: Der Balkon; Aufzeichnungen eines Müßiggängers in Baden-Baden. Suhrkamp, Frankfurt am Main 1978, S. 15.
- 2) R. Schneider: Verhüllter Tag. Gesammelte Werke. Bd. 10, Insel, Frankfurt am Main 1978, S. 54. 以下, VTと略記し, その後ろに頁数を示す。
- 3) R. Schneider: Autobiographische Notiz. Freiburg, 4. März 1953. In: Franz Anselm Schmitt(Hrsg.): Reinhold Schneider; Leben und Werk in Dokumenten. Walter, Olten und Freiburg im Breisgau 1969, S. 36.
- 4) Rita Meile: Der Friede als Grundmotiv in Reinhold Schneiders Werk. Paul Haupt, Bern und Stuttgart 1977, S. 19.
- 5) Hermann Hesse: Brief an den Hegner-Verlag, 8. September 1930. In: Reinhold Schneider; Leben und Werk in Dokumenten. a. a. O. S. 71.
- 6) R. Schneider: Brief an die Mutter, 23. November 1931. In: Reinhold Schneider; Leben und Werk in Dokumenten. a. a. O. S. 73.
- 7) R. Schneider: Brief an Anna Maria Baumgarten, 10. Mai 1932. In: Reinhold Schneider; Leben und Werk in Dokumenten. a. a. O. S. 73.
- 8) Ingo Zimmermann: Reinhold Schneider. Weg eines Schriftstellers. Union, Berlin 1982, S. 38.
- 9) R. Schneider: Tagebuch 1930-1935. Insel, Frankfurt am Main. 1983, S. 239.
- 10) ラインホルト・シュナイダーの没落感情については、拙論「没落の時代の詩人——ラインホルト・シュナイダーとポルトガル」(京都府立大学学術報告 人文・社会, 第51号 平成11年12月)においてすでに述べたところであるが、不十分な点があるため書き改めた。
- 11) 山本尤『近代とドイツ精神』, 未知谷, 2000年, 19-20 頁。
- 12) Wolfgang Frühwald: Die >Papierrosen der Literaturgeschichte<; Zur literarhistorischen Einordnung des Werkes von Reinhold Schneider. In: Carsten Peter Thiede (Hrsg): Über Reinhold Schneider. Suhrkamp, Frankfurt am Main. 1980, S. 316-319.
- 13) A. a. O. S. 317.
- 14) A. a. O. S. 318.
- 15) R. Schneider: Erfüllte Einsamkeit. Herder, Freiburg, Basel u. Wien 1963, S. 28.
- 16) R. Schneider: Schicksal und Landschaft. Herder, Freiburg, Basel u. Wien 1960, S. 349.
- 17) Ingo Zimmermann: Reinhold Schneider. Weg eines Schriftstellers. a. a. O. S. 26.
- 18) R. Schneider: Erfüllte Einsamkeit. a. a. O. S. 22.
- 19) R. Schneider: Brief an Miguel de Unamuno, 13. Dezember 1926. In: Reinhold Schneider; Leben und Werk in Dokumenten. a. a. O. S. 54f.

- 20) R. Schneider: Die ewige Krone. In: Edwin Maria Landau, Maria van Look, Leni Mahnert-Lueg, Bruno Stephan Scherer: Reinhold Schneider; Leben und Werke im Bild. Insel, Frankfurt am Main 1977, S. 20.
 後者の経験については自伝に次のように書かれている。「フィリップ二世の書斎と祭壇の横の臨終の部屋が徐々に抵抗しがたい力で私を圧倒した。ある一つの分銅が私の生に投げ込まれた。それは年を経るにしたがって沈んでいった。これを記している25年後の今、それが底にまで達したかどうか私には分からない。私は自分自身に成りはじめた」(VT58)。
- 21) R. Schneider: Die ewige Krone. a. a. O. S. 20.
- 22) R. Schneider: Die ewige Krone. a. a. O. S. 19f.
- 23) Pirmin Meier: Nachwort. In: R. Schneider, Gesammelte Werke. Bd. 1, Insel, Frankfurt am Main 1977, S. 472f.
- 24) Pirmin Meier: Die Fruchtbarkeit der Dissonanzen — Reinhold Schneiders Weg als Schriftsteller nach dem Zeugnis des Frühwerks und des Tagebuches. In: Ekkehard Blattmann(Hrsg.): Trauer und Widerspruch — Über Reinhold Schneider. Schnell & Steiner, München u. Zürich 1984, S. 17.
- 25) R. Schneider: Nachwort der Erstausgabe “Philipp der Zweite oder Religion und Macht”, Leipzig, 1930, S. 335f. In: Pirmin Meier: Die Fruchtbarkeit der Dissonanzen. a. a. O. S. 19.
- 26) A. a. O. S. 19.
- 27) ルイス・デ・カモンイスの生年については正確にはわからないが、一般には1524年または1525年とされている。(ルイス・デ・カモンイス『ウズ・ルジアダス (ルシタニアの人びと)』, 小林英夫・池上岑夫・岡村多希子訳, 岩波書店, 1978年, 522頁。Brockhaus Enzyklopädie in 24 Bänden; 19. völlig neu bearbeitete Auflage, 4. Bd. F. A. Brockhaus, Mannheim 1987. 集英社『世界文学大事典』, 第1巻, 1996年, 698頁他参照) シュナイダーがカモンイスの生年をヴェスコ・ダ・ガマの歿年と一致させたのは, カモンイスがポルトガルの繁栄の時代に生まれ, 没落の時代を生き, ポルトガルの死と同時に死んだことをより象徴的に表し, かつ『ウズ・ルジアダス』の主人公的存在のガマと作者カモンイスとの運命的な繋がりを暗示するという意図が働いたものと考えられる。
- 28) R. Schneider: Camoes oder Untergang und Vollendung der Portugiesischen Macht. In: Gesammelte Werke. Bd. 1, Insel, Frankfurt am Main. 1977, S. 48. 以下, Cと略記し, その後ろに頁数を示す。
- 29) ルイス・デ・カモンイス『ウズ・ルジアダス (ルシタニアの人びと)』, 小林英夫・池上岑夫・岡村多希子訳, 岩波書店, 1978年, 522頁。
- 30) Franz Baumer: Reinhold Schneider. Colloquium, Berlin 1987, S. 23.
- 31) R. Schneider: Tagebuch 1930-1935. a. a. O. S. 31.
- 32) R. Schneider: Lyrik. Gesammelte Werke. Bd. 5. Insel, Frankfurt am Main. 1981, S. 48.
- 33) R. Schneider: Tagebuch 1930-1935. a. a. O. S. 31.
- 34) R. Schneider: Gesammelte Werke. Bd. 6. Insel, Frankfurt am Main. 1980, S. 10.
- 35) A. a. O. S. 10.
- 36) Hans Naumann: Reinhold Schneider. In: Carsten Peter Thiede(Hrsg.): Über Reinhold Schneider. a. a. O. S. 62.
- 37) Friedrich Schiller: Werke, Nationalausgabe. Bd. 2. Tl. 1. Hermann Böhlau Nachfolger, Weimar 1983, S. 367.
- 38) Rita Meile: Der Friede als Grundmotiv in Reinhold Schneiders Werk. a. a. O. S. 21.
- 39) Franz Baumer: Reinhold Schneider. a. a. O. S. 29f.
- 40) R. Schneider: Schicksal und Landschaft. Herder, Freiburg, Basel u. Wien 1960, S. 39.

ラインホルト・シュナイダーの『カモンイスの苦悩』

- 41) Rita Meile: Der Friede als Grundmotiv in Reinhold Schneiders Werk. a. a. O. S. 23.
- 42) R. Schneider: Lyrik. Gesammelte Werke. Bd. 5. a. a. O. S. 80.

(2000年9月7日受理)
(しもむら きはち 文学部教授)